

# 2014年 International Negotiation Competition リポート

立命館大学法学部

夏 秋馬寧

## 【試合概要】

3日3ラウンドに分かれて、それぞれ①アイルランド、②韓国、③スコットランドと対戦。ラウンドの内容はそれぞれ①工業用鉄鋼の輸入②新開業ホテルにおける国際会議の開催③欠陥工事のフォローアップについてである。

## 【詳細経過】

### ① 対アイルランド

相手の交渉スタイルは柔らかく、譲歩できるトピックは積極的に譲歩していく姿勢を取っていたため、こちらの交渉スタイルとの相性も抜群であり滞りなく交渉をまとめることができた。ただし、全体としてはアイルランドが一気呵成に提案し、それに対して日本が突っ込みを入れるという様相を呈した。しかし、鉄鋼の品質保護や到着日時など、優先すべき事項をしっかりと把握し、傾聴することによって相手側にとって重要度が高い項目を判別できたことは審判の評価するところともなり、相手チームの感心するところともなった。

### ② 対韓国

相手は柔軟性ある交渉スタイルを演じているが、その実かなりハードな交渉スタイルであった。予想し得る全てのパターンを事前に書き出し、自分のシナリオパターンに応じた妥協しかない印象である。ラウンド②が値段交渉であることもあり、白板を使用して視覚効果を狙ったが相手の交渉スタイルも関係して効果は薄く時間を浪費し、結果急いで交渉をまとめる形となった。特に、相手側が交渉に関係のない日本代理人のプライベートを聞いたことと宿泊費の割引に関して双方譲歩せず、メリットが具体的な数値として出せないスポンサーによる集客作用を根拠に固執したので、他の論点を終えてはここに回帰することを2,3度繰り返す場面が時間を圧迫した。

### ③ 対スコットランド

相手のチームワークが上手く機能しておらず、始終話が一進一退という印象を受けた。交渉内容の性質上複雑な改修工事のプランについて白板を利用して視覚的に表示した

ことは有効だった。また、難航を予想していた改修工事の人的費及び材料費の負担に関しては相手側の秘密情報で ZOPA が広く設けられており、双方の交渉スタイルがともに譲歩を許すものであったので、あっけなく合意に至り時間に余裕をもって交渉をまとめることができた。

### 【反省・気づき・対策】

#### ① 語学力について

私は英語に対する反応速度がどうしても遅れた。対戦相手の内、非ネイティブ国の韓国を除けば、話のテンポが二つ三つはズレていたように感じる。チームメイトがネイティブであったため、一人が臨機応変に対応してもう一人が内容を吟味して突っ込みを入れるという戦略をとり、実践において日本が語学力で遅れをとったとは思えないが、ラウンド③においては審判に話に着いていけない印象を与えてしまったことは大きな反省点である。上位チームを見れば、淀みなく 2 人で畳み掛ける話法を使用したチームが多く、母語レベルの流麗な英語は勿論、積極的（アグレッシブでも問題ない？）な話法が好まれているとの印象を受けた。

#### ② 試合内容について

国内大会との相違点として、あくまで企業の代理人（lawyer）として交渉するため、論点に応じた役割分担が難しいことがある。誰がどこを話すかの線引きが曖昧になり、話が脱線し易く、人によって話す分量がかなり異なってしまったことが反省点である。また、試合においては相手国の文化をも考慮に入れた事前プレゼンテーションがあり、あくまでインターネットで仕入れた知識で相手を評価したことは失策だったようである。また、審判の判断基準は定められているが、例えば白板を使うことに対して審判個人の好き嫌いが評価に関わるなど、不確定要素がかなりあると感じた。

#### ③ 其々への対策

語学力に関しては、上位 7 位入賞を目指すならば、英語を母語とするレベルでなければならないと痛感した。提案内容の勝負というより、提案を如何にテンポよく伝えて説得するかを競っている印象を受けたためである。対策として、少なくとも本番 1 ヶ月前はネイティブと毎日英語を使って専門的なやり取りできることが望ましい。試合に関しては、日本国内大会のスタイルを活かすため、そして話が混線しないために、きっちりと誰が何処を話すか、どの部分に決定権を持つかを決定すべきである。相手は試合間近にならないと判明しないため、できるだけ準備期間に過去の主要参加国の留学生と接するなどして、各国の生の交渉文化を学んでおく必要があるだろう。

### 【総評】

国内大会の延長と考えて臨んだのが、今回の何よりもの失敗であった。問題文に与えられる情報量は年度によって異なるが国内大会よりも少なく、準備期間の質問機会もないため、その分推測に頼った点が多く残ったまま本番を迎える。オリエンテーションで質疑応答があるが、応答を踏まえた準備期間は1日しかなく、万全とは言えない姿勢で試合に臨まざるを得なかった。次回の参加者には是非、様々な問題文解釈を用意した上で臨んで欲しい。一方、法的な提案の自由度はかなり高いと考えるので、冴えた提案内容を用意して相手をこちらのペースに引き込み、言語的劣後を挽回できるはずである。そして、各国から優秀な法学生が参加するため、法律の国際交流という意味でも自らを高める良い機会であったように思う。